

◎立教大学史学会大会特集報告

近代ヨーロッパにおけるナシヨナリズムとキリスト教

趣旨説明

井出 匠

本シンポジウムのテーマは、近代ヨーロッパにおけるナシヨナリズムとキリスト教との関係を、改めて検証するというものである。これまでも、少なくとも一部の研究者にとつて、ナシヨナリズムと宗教との関係は重大なテーマであり続けた。ハンス・コーンと並んでナシヨナリズム研究の草分けとされているカールトン・ヘイズ [Hayes 1960] は、ナシヨナリズムを「ひとつの宗教」とみなす。すなわち彼の指摘によれば、ヨーロッパにおいて最初に発展した近代ナシヨナリズムは、その一見脱宗教的・世俗的な装いにもかかわらず、ネーションを支えるための精神性（ネーションへの熱情・忠誠・献身・犠牲の美化など）やその表現形態（儀式・祝祭・シンボルなど）のなかに、ヨー

ロッパの宗教であるキリスト教から多くの要素を取り入れているとされるのである。このようにネーションと宗教のあいだの質的な類似性に着目する議論は、その後の理論的研究にも受け継がれていった。例えばベネディクト・アンダーソン [Anderson 1983] は、文化システムとしての宗教共同体が衰退したあとに生じた、生の有意義性への渴望を満たす役割をナシヨナリズムに認め、宗教的想像力とナシヨナリズムの想像力の親和性を強調した。最近ではロジャース・ブルーベイカー [Brubaker 2012] らによつて、近世ヨーロッパにおけるいわゆる「宗派化」が、ナシヨナリズムの中核をなす「文化と政治の合致」のモデルと基盤を提供したとする指摘がなされている。

こうした包括的な理論的研究とは別に、ヨーロッパ各地におけるナショナリズムやネーション形成の個別事例にかんする歴史的研究においては、個々の宗教や宗派とナショナリズムとのより直接的な結びつきが問題とされてきた。例えばリнда・コリー [Colley 1992] は、一八世紀に「イギリス人」(Britons) のナショナル・アイデンティティ形成を可能にしたものは、(カトリックのフランスとの対抗関係において) プロテスタントイデオロギズムであったとする。これにたいして一九世紀のイギリスでは、(プロテスタントのイギリスとの対抗関係において) カトリシズムとナショナルな解放運動が一体となり、一八八〇年代以降はカトリックとナショナリスト/プロテスタントとユニオニストの構図が定着したとされる [Connolly 2007]。ただし、キリスト教の特定の宗派のアイデンティティが、特定のネーションのアイデンティティの基盤を提供し、かつ強化しえたという単線的な図式の妥当性については、常に一定の留保を設けておく必要があるだろう。ポーランドを例にとれば、一九世紀前半のプロイセン領ポーランドの都市ポーゼン(ポズナン)では、カトリックとポーランドの、またプロテスタントとドイツのアイデンティティの接合がそれぞれ進展したとされる一方で [Alvis 2005]、一九世紀末と二〇世紀初頭のドイツ領ポーランド・上シュレージ

エン(シロンスク)地方では、カトリック信仰は必ずしもポーランド・ナショナリズムへの支持には結びついていなかったと指摘されている [Bjork 2008]。

このように、宗教、とくにキリスト教が、近代ヨーロッパのナショナリズムの発展に何らかの形で影響を与えたことは確かであるにしても、その個別具体的なありようについては、なおも検討の余地が多く残されているように思われる。そこで本シンポジウムでは、両者の関係性についての抽象的ないし固定的な把握にとらわれることなく、広くキリスト教にまつわる人々の思考や行動が、様々な歴史的・社会的文脈に規定されつつ何らかの形でナショナリズムにかかわっていった、その多彩なあり方に着目していきたい。具体的には、正教とギリシア・ナショナリズム、プロテスタントとアフリカ植民地のナショナリズム、カトリックとスロヴァキア・ナショナリズムにかんする個別事例を取り上げ、それぞれのケースにおけるキリスト教とナショナリズムとの錯綜した関係性に光をあてることを目指す。そこから、「宗派」や「ネーション」といった包括的な分析枠組みに回収されることよって、かえって不可視化されてしまうような、人々の意識や行動、「アイデンティティ」なるものの実態に近づくことができると考えている。

このシンポジウムでは報告者として、南東欧、とくにギリシア近現代史がご専門の村田奈々子氏（東洋大学）、イギリス近現代史がご専門の大澤広晃氏（南山大学）、またコメンテーターとして、ポーランド現代史がご専門の加藤久子氏（国学院大学）、ユダヤ史、とくにロシア・シオニズムがご専門の鶴見太郎氏（東京大学）をお招きした。これら登壇者の方々を中心に、また会場の皆様を含めて、歴史学の見地からもまた現代の視点からも重要かつアクチユアルな、ナシヨナリズムと宗教という問題についての活発な議論が展開されることを期待したい。

参考文献

- Alvis, R., *Religion and the Rise of Nationalism: A Profile of an East-Central European City*, Syracuse University Press, 2005.
- Anderson, B., *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London, 1983（『ネディクト・アンダーソン』増補 想像の共同体：ナシヨナリズムの起源と流行』白石さや・白石隆訳、NTT出版、一九九七年）。
- Bjork, J., *Neither German nor Pole: Catholicism and National Indifference in a Central European*

Borderland, The University of Michigan Press, 2008.

Brubaker, R., “Religion and Nationalism: Four Approaches”, *Nation and Nationalism* 18 (1), 2012, pp. 2-20.

Colley, L., *Britons: Forging the Nation 1707-1837*, Yale University Press, 1992（リンダ・コリー『イギリス国民の誕生』川北稔監訳、名古屋大学主出版会、二〇〇〇年）。

Connolly, S., “Religion and Nationality in Ireland”, in: Altermatt U., Metzger F. (Hrsg.), *Religion und Nation: Katholizismus in Europa des 19. und 20. Jahrhunderts*, Stuttgart, 2007, s. 119-134.

Hayes, C., *Nationalism: A Religion*, Macmillan, 1960.（本学文学部特任准教授）